

風に吹かれて (37)

白井啓治

『振り返れば確かな点の一つ』

2月に陸平遺跡の文化財センターでことば座とオカリナの野口さんが招かれて公演を行ったのであったが、その時に、陸平をヨイシヨをする会の田島早苗さんより「霞ヶ浦のほとり」というエッセイ集を頂いた。このエッセイは、田島さんが入っていた俳句の同人誌「春耕」に百回にわたって書かれた「四季の霞ヶ浦」を一冊にまとめ出版されたもので、出版時にタイトルを「霞ヶ浦のほとり」と改めたものである。

同人誌に毎月一回の執筆で百回の達成は大変なことである。原稿用紙数枚の分量であっても、百ヶ月連続して休みなく書き続けるというのは考える以上に変なことである。年数にして8年と4ヶ月を要する。当会報は今年6月で満五年を迎えるが、それでもまだやっと60号である。100号というのは実は容易な回数ではないのである。

自分が文作屋であるから言うわけではないが、千枚の原稿の依頼は楽ではないが頭を抱えるようなことではない。ところが数枚のエッセイを毎月書いてくれと言われると即答を避ける。三年ほど前のことであったが、常陽新聞に月三回の約束で

原稿用紙二枚分程度の雑文を頼まれ、一年間書いたことがあったが、途中で厭になったものである。日々の雑感を書くものであったが、新聞という事もあって貯め書きして渡すと、時事的な鮮度が落ちると、毎週送っていたのであるが実際に大変なことであった。

田島さんのエッセイには、霞ヶ浦に纏わる百の物語が日々の風景とともに伝えられている歴史話の中に書かれてあり、楽しく読ませていただいた。田島さんの日々の暮らしの中には、田島さんならではの点が確実に打たれてあることが窺われ、些かへそ曲がりなこの読者をほっとさせてくれた。

風の会の人々には、この会報に発表した文章は100〜150ページ分程の量になったら必ず小冊子に纏め定価を付けて風の文庫として出版することにしている。こんな小冊子、お金を出して買う人がいるはずもないじゃないかという方、思われている方も多いであろう。しかし、これは会員の皆さんには伝えていることであるが、自分自身の思い・考え・主張をより強いメッセージとして責任を持って語っていくことの形なのである。

ふるさとの歴史文化の再発見と創造を考える、ということはその誰かに聞いてもらえるように大声することが必要なのであるが、その大声の一つが文庫の出版という事なのである。

また誰かに自分の主張や考えを聞いてもらうためには、主張を間断なく発信することが大切である。風の会の会員である間は、決して休むことなく毎月自分の思う事を話していくことを暗黙の会則としている。

霞ヶ浦のほとりで、を読み、風の会として大いに刺激を貰うと同時に隣町に大切な友人のできたことを常世の風に感謝せねばと思っている。

東北関東大震災被災地及び

被災者の方々へのお見舞い申し上げます

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。会費は月額 2,000 円。
入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

歌へのこだわり

鈴木 健

【早春賦】

一 春は名のみ風の寒さや。谷の鶯歌は思えど、
時にあらずと声もたてず。時にあらずと声も
たてず。

二 氷解け去り葦は角ぐむ。さては時ぞと 思うあ
やにく、今日もきのうも 雪の空。今日もきのう
も 雪の空。

三 春と聞かねば知らでありしを。聞けば急かる
胸の思いを、いかにせよとの この頃か。いかに
せよとの この頃か。

小学校低学年か幼稚園のころか、母がお勝手仕事
をしながら、よく唄っていた。特に三番が好き
だったようで、私には意味がわからなかったが、
「いかにせよ」の繰り返しは、父に今夜のおかず
はイカにしるといわれたのかと思ったりしていた。
そして、父が帰宅すると、ぴたっと唄うのをやめ
るのもなぜだろうと思っていた。おとなになって、
ふと思いついた。ある若者が母に恋心をいだけ
ていたことを友達伝いにでも聞いて、それをこの
歌詞にかさねたのではなからうか。と。そして、
その母を野辺に送ったのはちょうど二番のような
空模様の日だったので、みなさまへのご挨拶にこ
の歌の思い出を口にしてしまった記憶がある。と
にかく今でも私の一番好きな歌だ。

数年前、有名な小学唱歌にちなんだ切手シリー
ズが発売された。歌いだしの楽譜とその背景画と
いう取り合わせだ。早春賦の作詩者吉丸一昌は東
京音楽学校（現・芸大）教授。安曇野を訪ね穂高町

辺りの雪解け風景に感銘を受けて作詞したという。
地元では、この曲と風景を誇りにし、穂高町（現・
安曇野市）では「みどりの日」にその歌碑の前で「早
春賦祭り」が行われている。そのようななかで、
背景画には、当然ながら早春の安曇野の風景が期
待されていた。また、そういういきさつを知らない
ひとでも、この歌詞からは自ずとそのようなイ
メージをいだいたはずである。しかも、絵筆を執
るのは名だたる日本画家。

ところが期待は見事に裏切られた。薄暗い森の
端の五重塔。春の兆しか春を待ち望む気持ちには
少しも感じられない。この忙しいのに、そんなも
の画いていられるかと、適当に古い絵をあてがっ
たと思われぬ。人々の失望、とくに知人の
話によれば、信州の皆さんの落胆と権威不信は気
の毒なほどであったという。ちょうどそのあと、
グループで安曇野へ出かけたことがあった。歌碑
の近くのテントで観光切手を売っていたおばさん
「あれを描いた人はバカだ」、私「郵政省もバカだ」、
二人「どっちもバカだ」と、意気投合。だが、バ
カではすまされない。郵政省は莫大な謝礼を用意
して権威者にたのんだから後はお任せ。本人は俺
様のやることに文句を言うなというところか。は
からずも、官僚と権威者のいやなところが表に現
われたような一幕であった。

なお、二番の「葦は角ぐむ」は、後拾遺集に「難
波潟浦ふく風に浪たてばつぐむ葦の見えみ見え
ずみ」とあり、作詩者の古典に対する造詣の深さ
がしのばれる。

草木が芽をだすのを古語で「芽ぐむ」、それが角
のようであれば「角ぐむ」。葦には牛の角のような
芽が生えるが、それはより古くは「葦牙（アシカビ）」

（日本書紀）と言われた。カビ（Kabi）はキバ（Kiba）
の「i・a・a」である。それは「可美（ウマシ）葦牙
（アシカビ）」（同）とも呼ばれ、豊葦原の中つ国（日本
では、生鮮食品がない早春の、貴重なうまい食べ
物であったらしい。「芽」も文字どおり草の「牙」
である。

【花】

一 春のうららの隅田川のぼりくだりの船人が
權のしづくも花と散る ながめを何にたとうべ
き。

二 見ずやあけぼの露浴びて われにもの言ふ桜木
を見ずや夕ぐれ手をのべて われさしまねく青
柳を。

三 錦おりなす長堤に くるればのぼるおぼる月。
げに一刻も千金のながめを何にたとうべき。

戦争が終わっても中等学校の男女別学は続いた
が、もんぺをスカートに履き替えた女学生たちの
表情はあかるくなった。新学年の始業式がおわつ
て友と近くの沼の桜並木の土手に腰をおろして話
をしていると、カーブした堤防のはるかかなたに
数人の彼女たちが姿を現し、こちらへ向かってき
った。私たちを見つけてデモをかけてやろうとでも
思ったのであろう。適当な距離になると、一斉に
「春のうららのー」を歌い出した。しかも、き
れいに二部でハモっている。その歌声にすっかり
魅せられてしまったのはいうまでもない。思えば、
戦争中は全体主義、画一主義一色で、歌といえは
斉唱にきまつていて、人とは違うメロディを歌う
などはとんでもないという時代に生きてきたので

ある。私たちは、その悪魔たちの天使の歌声がうしろを通り過ぎるのを、下を向き息をこらして耐え忍んだのだ。この歌が好きなのは、そのような思い出があつたからかもしれない。

あるときなぜか、三番の「錦おりなす長堤に」の意味を知りたくなつた。秋の「赤や黄色の色様々に水の上にも織る錦」(紅葉)はわかるが、春の堤防の錦はなにか。それがわかるまでは死ぬにも死ねないと思うようになった。高校の、さらに大学の先生にまで聞いたが、答えが出ない。そんなことを考えたこともない。気にしないで歌つたり教へたりしている。とのこと。孤立感とあせりを深めていたある日、親友にそのことを話すと「みわたせば 柳櫻をこきまぜて 都ぞ春のにしきなりける」(古今和歌集)と、こともなげにそらんじたのは恐れ入つた。それ以来、私の畏敬の念が急激に昂じたことは言うまでもない。今も、京都鴨川の堤にはそのような景観が見られるという。それを東の都の隅田川にも移したのであろうか。あらためて歌詞を見直すと二番がその予告編になつていた。作者者武島羽衣の博識にも敬服のほかはない。三番にある「一刻も千金の」は、これもまた漢詩の「春宵一刻値千金」をよりどころにしていることはいうまでもない。さらにしつこく言うと、美男美女のことを古語で「もの言ふ花」とも言うそうで、そうなると、二番の「われにももの言う桜木」には、その意味も重なつていたのかもしれない。西行は「願はくは花の下にて春死なんその如月(キサラギ・二月)の望月(十五夜)のころ」と読んで、後日びつたりその日に往生したという。ところが、この歌は事実と矛盾する。旧暦二月十五日は花時には早すぎるといふ権威者がいた。新暦は

旧暦のひと月遅れとでも勘違いしているのではなからうか。早すぎる年も早くない年もあるのだ。

【夏は来ぬ】

一 うの花のおう垣根にほととぎす 早もきなき 忍び音もらす 夏は来ぬ。

二 四省略

五 さつきやみ蛩とびかい くいなき 卯の花さきて 早苗うえわたす 夏は来ぬ。

「うの花のおう」が香のことではなく色のことであることはわかるが、その「垣根にほととぎす」が来ることがあるのだろうか。「鳴きて 忍び音もらす」はどういう意味か。この曲でも、私の権威不信が鎌首を持ち上げる。

最近、坂東市の自然博物館でいまだき珍しい卯の花の垣根を見て、そのセンスのよさに感心した。その卯の花が咲く旧暦四月(卯月)はホトトギスの渡りがあるので、古来両者はセットで歌に詠まれることもあつたが、それは「卯の花月夜」とか「卯の花山」であつて、低い「垣根」ではない。しかも、その鳴き声が、「鳴き響(とよも)す」「鳴き渡る」と詠まれるように、高いところで、「声の囀(む)るがに」「名告(の)り鳴く」(万葉集)のである。「木高くはかつて木植えし ほととぎす来鳴き響めて 恋まさらしむ(木高くは決して木を植えまい。木が高いとホトトギスが来て鳴きたてて、わたしの恋心をつのらせるから)」(同)。このような歌まで詠まれている。「鳴いて血を吐くほととぎす」の一節も記憶のどこかにある。私の近くでも、ホトトギスは、けたたましく鳴きながら飛んできて、森の上の方に姿を隠し、時折

くぐもり声を交えながら、かん高い声でその続きを鳴く。

中世には、旧暦四月のホトトギスは忍び音で鳴き、五月になると公然と鳴くという考え方が固定していたようで、四月三十日の『和泉式部日記』には「ほととぎす世にかくれたる忍び音(む)をいつかは聞かむ今日もすぎなば 四月も末の今日が過ぎてしまひましたら、ほととぎすの姿をかくしたひそめ声をいつ聞くことができるでしょう。今日はぜひお忍びでおいでください」とある。このように、ホトトギスは世にかくれたるしのびの姿で、そして、時によりトーンダウンした声で鳴くが、それは決して忍び音もらすのヒソソ声ではない。しかも、垣根でそれをするようなことはないはずだし、鳴いて忍び音もらすも何のことかわからない。それなのに、著名な国文学の大家はこのような歌詞を作り、小学生は明治時代からそのとおり歌つてきたのである。

二番 四省略はさすがであるが、五省略は蛇足。すでにたね切れか、四省略までに使ったキーワードを再度総花的にべたべた張り合わせただけのもので、興ざめ。ない方がすっきりする。

「夏は来ぬ」もおもしろい。キヌと読めば完了形、コヌと読めば否定形になる。「原爆の囀」を画いた丸木俊さんの、「母堂の口癖は「ピカは人が落とさきに落ちてこぬ」だった。「君待てどもまだこぬ宵、さびしい夜」、口語では「雪が降るあなたほこない」。それを茨城では「きない」。では「どつちが正しいか先生に聞いてみよう」「先生はまだきないからだめだよ」。日本語は難しい。

また悪い病気が、ぶり返した。
局面打開策でもなし。

叡智を結集した、建設的な秘策でもなし。
折角、郷土の文化を盛り上げようとして発足した『ふるさと、風』なのに、私のようなトンチンカンが加入して、トホウもないことをクドクドとまくし立てる。まともなことを書こうとすると、すぐ堅苦しくなる。さりとて機微に富んだ人情話も、武骨者の私には不向きである。

浮世の雑事は、馬耳東風と聞き流せば、私も、一角の紳士面して猫を被っていられるものを……。すぐ人類の凶暴性など、アホらしいことに口をはさむから、脳味噌の程度が、すぐバレる。今月もまた詮無いことに筆をとる。

社会に貢献するでもなし。多少は寄付などもしてはいるが、伊達直人のように陰ながら、恵まれない子供を本気で支援するでもなし。いたずらに馬齢を積み重ね、重鎮として思慮深い意見を吐くでもなし。今は元気だが、そのうち要介護などになつたら……。それでも、黙って、いつも静かに笑顔を保ち、顔を絶やさずに……というなら、まだかわいいが、調子込んで物を書いたりする。吠えまくる老犬など、絵にもならない。

これも私の悪い癖。すべては私自身に責任があるのだが、もう世直し建議の気力も失せた。局面打開のための正当論を提案する前に、ひねくれた社会時評などに逃げ込む。片田舎の唐麥木に今更、耳を傾ける奇特な御仁もあるまい。となると持つて生まれた悪い癖。すぐ現状の社会を皮肉りたくなる。それに火をつけるのがいつも「政治」だ。

通常国会が開会し、あの下品な質疑の繰り返し。

何が国権の最高機関ですか？ 党利党略の足の引っ張り合い。醜い事この上なし。高給を得ているが、気に入らないから審議拒否など、税金泥棒も甚だしい。議論をするための代議士なのに、それを拒否するとは許せない。それにしても、与野党とも論客は、正に視野狭窄症。根底には人気取りの集票論理があるだけ。売名の演説には、もう飽きた。国家百年の計など口先だけ。人気取りの政策を実行したいのなら、まず財源の確保。そのためには、職員の給料を下げたり、定数を減らす前に、まず率先して国会議員の数を減らし、報酬を下げ、「院」を一つに減らして、最大の無駄を解消し、自ら範を垂れてから、物を言ったらよい。自分の懐は痛めずに、まず弱いものに襲いかかる。そんなのは、政治とは言わない。それ故、老犬が吠えだしたら、どうにも、止まらなくなる。

『出る釘をたたき潰すから、将来大物となる芽を、摘んでしまう……』と、我が国最初の、平民宰相「原敬」は若手をかばった。しかし、いつの時代も、向こう見ずの暴漢はいるもので、宰相は東京駅南口で刺殺された（1920年）。同じく日本社会党委員長「浅沼稻次郎」は、右翼少年に暗殺された（1960年）。あまりにも短絡的な思慮浅き暴力。暴力は未熟社会の典型だ。今の時代は、政治家が、暴力で抹殺されることは、あまりなくなつたが、屁理屈による言論の自由で、誹謗合戦は、あまりにも醜い。

さて、このように政権基盤が不安定で、多額の借金（2011年度末債務残高⁹⁹兆⁷⁰⁹億⁹⁹円）を抱え、財政立て直しの智慧も気構えもなくしては、国債の格付けが下がるのも当然。これでは、近隣の狐や

狸がほくそ笑んで、つけ狙ってくるのも当たり前。

水源の山林など、国土を買い漁られ、首根っこを掴まれたら、身動きができなくなる。弱り目に祟り目というか、多重債務者から、尚もむしり取るうとする貸金業者みたいに、近隣の腹黒い国々は、日本の衰弱を、ひたすらに待つ。そして世界は、莫大な債務で、産業が空洞化した、しかも少子高齢化の日本の行く末を、好奇の目で見ている。内政の不安定は、外交の弱体化を招く。未曾有の危機感が足りない。内輪もめで弱体化……。これこそ近隣の狙いどころ。議事堂とか言うバケツの中で、蛙どもがケンカしている場合ではあるまい。財政立て直しと国家の安全保障。そして、子孫が平和に暮らせる環境整備に、超党派一丸となつてこそ、代議士は「選良」と呼ばれる価値がある。

さて、私も国民の一人なら、どんなささやかなものでもいいから、国政に関し、打開策の一案でも提言する義務があるろうが、呆れ果てる方が先に立ち、建設的発言より先に諦めの無駄事を並べたくなつてしまう。低俗な川柳などが先に浮かぶ。敵前逃亡は重罪だ。義務を果たさないヤツに、文句を言う資格はないのだが、あんな国会議員を選んだ我々一人ひとりに重い責任がある。老若男女全員が一人当たり700万円ほどを国家へ供出すれば、一応、国の借金は、解消するのだが……。冗談ではなくて、日本の行く末が本当に案じられる。

そんな現実からの逃亡を望むせいか、この頃、しばしば宇宙人の夢を見る。

地球人は、いくら、文明を重ねようが、煩惱から逃れられず、俗世をさまよう。1個人の中に、破壊された人格と、時に高潔な人格が同居する。

慈愛と暴力・高邁な精神と卑劣な精神も同居する。五感は劣化し、バランスを欠いた過剰繁殖。そのため、乱開発による自然破壊・環境汚染。乱獲による絶滅危惧種の増加。人種・宗教・所得格差などによる限りない対立。そして、俊敏さなど野生に生きる能力は極度に低下した。大脳ばかりが膨らんで、強欲を突っ張り、争いばかりしている。調子込んで、直立2足歩行などしたために、肩こり・腰痛・膝関節炎・痔疾。胎児も頭でっかちで難産のため、母体を死に追いやることもある。

人間この未知なるもの。もろそうで結構しぶとい。利口そうでド阿呆。宇宙人よ！あなた達も進化の過程で、こんな道のりを歩んだのですか？

地球人は、こんな多くの矛盾を抱えて、ヨチヨチ歩きの不成熟だが、なんかしら威張りくさっている。一向に進化しない地球人に呆れ果て、もしや宇宙のどこかに、進んだ文明を持つ異星人がいるのなら、ぜひ御指導願いたいもの。

計算上、わが天の川銀河系内だけでも、主星と惑星との関係で、生命が存在しうる惑星は、¹⁰⁰⁰万个ぐらい存在するという。NASAの最近の発表によると、現在（²⁰¹¹年1月）太陽系以外の惑星を、¹²³⁵個発見しており、その内、液体の水があると考えられる惑星は、⁵⁴個もあるという。即ち生物が存在しうる惑星だ。とすれば、そのいずれかで、地球人より遙かに知能の進んだ生物がいても、おかしくはない。時々この地球へ、様子見にやって来ているかも知れない。

しかし、NASAの発表によると、これまで、UFOなど、この地球に訪れた気配は全く見当たらず、更に宇宙からの人工的な電波など、一切傍受できない。どんなに文明が進歩しても、宇宙通

信に、電波を使わないはずはないという。しかし、それは現段階の地球レベルの判断であって、私に言わせれば、高度の文明を獲得した宇宙人は、地球人などにキャッチされるような情報発信をするわけがない。同レベルの敵がいるかもしれないのに、自分の所在を明確にするわけがない。

生命体も、どんな姿をしていることやら……。サッカーボールのような脳味噌の球に、手足が付いているだけの透明人間？……。どんな格好をしているか知らないが、姿を掴めないから、地球に全く来ていないとは、断言できないであろう。

地球の文明より、¹⁰⁰⁰万年ぐらい先行していれば、想像もできない社会構造に違いない。宇宙は¹³⁷億年前のビックバンで同時スタートしたのだから、銀河系が違うからと言って、全く異次元の物理法則に支配されているわけではない。構成元素など、そんなに違うわけもない。しかし、我ら人類には未解明のブラックマターや、ブラックエネルギー等は、先進宇宙人には、すでに解決済みで、生活の中で、既に応用されているのかも。そして「反物質」なども、支配済みなのかもしれない。

【「反物質」とは、この地球上の普通の物質とは全く逆の鏡像関係にある素粒子により構成され、陽電子や反陽子等の「反粒子」からなる。反粒子は、想定上のものと考えられていたが、今日では、実験的に存在が確認されている。これら反物質が、もし普通の物質と衝突したなら、巨大なエネルギーを放射し、一瞬にして素粒子は崩壊し、消滅する。例えば、反物質でできている宇宙人の男と、普通の物質からできている地球人の女とが、もし接触したなら、閃光を発生し爆発を起こし、瞬時にして両者は消滅してしまう……と考えればよい。】

そのような文明を持つ彼等が、仮に地球を訪れているにしても、勿論、発展途上の地球人などの目に留まるような、ヘマをするはずはない。しかし、万有引力の法則など、とっくに乗り越え、光速に近い乗り物で、物見遊山でもしているか？地球人の粗末な大脳の思考回路など、天空から、全て読みきって、からかうのも、アホらしいと、相手になどして欲しくないだろう。たまにノーベル賞クラスの頭脳を見つけると、『オヤ、珍しい。かわいいヒョコがいるわい』と、ひそかにエールを送ってくれるかもしれない。

好戦的な地球人は、すぐ「宇宙戦争」などと、幼稚な発想しか浮かばないが、宇宙戦争とか、そんな幼児じみた考えなど、宇宙人は微塵もないはず。B²⁹に竹槍を用意したどこかの国みたいに、全く相手にされないだろう。もし宇宙人が、ほんとにやる気なら、反物質の弾丸でも放り出せば、地球など丸ごと消滅。或いは、コンパクトなブラックホールでも投げ込んで、地球を一気に丸呑みさせれば、簡単に済むが、彼等には、「宇宙倫理」のようなものがあり、そんな野蛮なことは実行しないだろう。それゆえ、こんな低能地球人と、一戦を交えるようなナンセンスは、所詮起こりっこない。象が蟻となんか、ケンカしないのと同じ。

* * * * *

わが太陽は⁵⁰億年前・地球は⁴⁶億年前に誕生。そしてこの惑星に生命が誕生して⁴⁰億年が過ぎた。もしかして、地球に生命をもたらしたのは、どこかの異星人かも。ちよつとした、いたずら気分、種子を播いたのかもしれない。なにはともあれ、その間この地上には、多くの生物が誕生しては滅び、栄枯盛衰を繰り返した。そして今は、

哺乳類という最後に誕生した生物の中から、人類という、あまり利口ではないが、一応知能を持った動物が繁栄し、この地球上を席巻している。

その人類は、のぼせ上って、万物の霊長などと自認しているが、やることはメチャクチャ。歴史の大半は戦争で明け暮れた。人間同士の残酷な殺し合い。大型類人猿でも、人類と早いうちに枝分かれしたオランウータンやゴリラは、極めて温厚な動物だ。仲間同士殺し合うようなことは、観察されていない。しかし後から枝分かれしたチンパンジーは、かなり凶暴性があり、殺し合いもする。一方、チンパンジーの一種「ボノボ」は、普通のチンパンジーより小型で、顔には毛がなく、小枝など道具を使う。そして非常に温厚な動物である。もし群と群が接触して、一触発状態になった時など、互いに群れの中の若いメスを差し出し、相手のボスを慰め、無駄な衝突を未然に防ぐという。正に猿智慧ですな。

このように、猿でさえ、無駄な戦いを避ける智慧があるというのに、いかほど文明を積み重ねようが、人類は、平和で温厚な動物には進化しない。大量に敵を殺した者は、英雄として祀られる。その反面一人を殺した者は、殺人犯として、厳しい制裁を受ける。全くメチャクチャだ。更に、「法律」とか言う変なもので、「ガンジガラメ」が大好き。ドイツの諺に「法律とはクモの巣のようなもの。ハエは捕らえられるが、カブトムシは突き破って逃げていく」という。身の回りの「法律関係」をよく見て下さい。メチャクチャもいところ。とにかく、巧妙に法の網をくぐりぬけ、悪いヤツほどよく眠る例がゴマンとありますぞ。

日本の3大ザル法とは、①売春禁止法、②政治

資金規正法、③建築基準法なのだそう。どれを見て大ザル。一応文明国なら、これくらいの法規制が整っていないければ笑われるから…と、ひとまず格好つけているだけ。その裏街道は、全く迷路の「獣道」。

地球温暖化防止のため、CO₂排出量を制限する国際協議が行われても、排出量が世界の19%を占めるアメリカ、22%を占める中国が、これに賛同しない。これでは日本やヨーロッパの先進国が、いくら努力しても、温暖化防止は遅延として進まない。近年温暖化のため、世界各地で洪水被害が増加傾向にある。昨夏、中国・パキスタンで400人が洪水で死亡。今年1月には、豪州・ブラジルで多数の死者・行方不明者が出ている。どこで誰が死のうが、自分達だけ、今の今、豊かで幸せならそれでよい。これが地球人だ。いかほど文明を重ねても、少しも進歩しない。

世界各地での紛争も後を絶たない。国民の生活を無視した横暴な政権執着。残酷なテロリズムの横行。他国の領土を侵略しようとする欲深さ。経済戦争。特許権侵害。商品の偽装詐欺。数え上げたらきりが無い。折角、救済や互助精神など人道的な活動も、人類を歴史的に総括する時、戦争など巨悪のために打ち消される。芸術・文化の向上も、人類全体としての進化の方向性を検証する時、暴力などのため、評価はガタ落ちとなる。

そもそも何でこんなバカ社会が出来上がったか？ これも人間の「性(さが)」と言ってしまえばそれまでだが、DNAというヤツは、とにかく、『楽して己の子孫を沢山作りたい』という本性から来ているとしか言いようがない。私の精巣も、あなたの卵巣も、基本的には同じ原理に支配され

ている。他を犠牲(食糧として)にしても、まず自分だけは生き残ろうとする根本原理だ。DNAという物質は、そういう強烈な「意志」を持って全ての生物を支配している。人間は、どんな聖人君子であろうが、その辺のミーハーであろうが、体内の60兆個の各細胞の中にある、単純な物質DNAに、完全に支配されている。我々は、80年という期間を、DNA増殖工場として、ただ生かされているだけ。不要になれば、ポイと捨てられ、DNAは次世代に乗り移っていく。何が優れ、何が劣るか知らないが、その個体とその環境の中で、新陳代謝や増殖をやりやすければ、そのDNAが乗った乗り物は子孫を残していける。乗り心地の悪い乗り物は、自ずと絶えていく。

地球の生物より、何億年も早くから生命が存在した星では、生命を繋ぐ物質は、DNAとは限るまいが、どのように進化したことやら。高度の文明を築くためには、個体の寿命は、地球の標準なよりもはるかに長いかもしれない。いずれにしても地球人のように、激しい闘争の繰り返しでは、高度の文明は築けない。知的生物なら、1万年ぐらいの寿命は必要か。己の過去を振り返って反省し、自分が生かされた社会に、恩返しのための時間を持つためには、長い寿命が必要であろう。

さて、体調2mmのミジンコには、3万1千個の遺伝子があるという。しかし人類は、2万3千個の遺伝子だが、どんな苦勞でも乗り越えて、確実に子供を育てる(最近の変な人間を除いて)ようにプログラム化されている。どのような生物も、ただひたすらにDNAの命令に従い、己のコピーを残すことに専念させられている。そしてどの生物も、同じようなDNA支配を受けても、進化の

過程で、気候・食物・天敵など、環境に恵まれれば、南米のナマケモノみたいに、木にぶら下がり、鼻提灯で、昼行燈の穏やかな動物もいる。私が願望するスローライフの典型だ。

一方シーラカンスのように、極力体力消耗を防ぎ、数億年も体型を変えないことなく、生き延びる動物もいる。しかし何か、生存システムに不具合があれば、種としての寿命は、長続きはしない。ヤブカラシみたいに、何が何でも周りの植物の上に伸びて、太陽光を一人占めしようとするナラズモノもいるが、どうやら、ずうずうしいのが世にはばかる傾向は、動物・植物ともに共通のようだ。

生物により、どのような生存形態を取ろうが、基本的にはみな同じ。地球では、40億年前、海の底で、核酸(DNA・RNA)を薄い膜で囲い、新陳代謝をして、自己複製する「原始生命」が誕生した。おそらくこの1個の「細胞もどき」が最初となり、全ての生命は、進化・枝分かれしていった。バクテリアや植物や動物に……。そう考えなければ、現在のあらゆる生物に共通した「新陳代謝」「増殖」「非自己の排除」等の説明がつかない。これらの共通項に関係のない生物はいない。

* * * * *

話は飛ぶが、今から七万年前、アフリカを飛び出した僅か150人ほどの現全人類の祖先「ホモ・サピエンス」が、世界に散って今日、68億人にも増えた。生物としての異常増殖を防止する繁殖コントロール機能を失い、ただ欲望の奴隷と化し、むやみやたらとその数を増やした。そう遠くないうちに100億人にもなろうとしている。しかし、その子孫達は、それ、肌の色や宗教が違ってもか、イデオロギーが異なるとかで、寛容性がなく、激しく

応酬し合い、醜い仲違いを演じている。同じ民族でありながら、肉親同士さえ離れ離れになって、激しく対立している国もある。同じ国内でも、所得格差や宗教などで対立の激しい国もある。武器は進化し、効率的な大量殺戮へと発展していく。人類とは、なんちゅう情けない化けものだ？

宇宙人は母星を飛び出し、好都合な天体があれば、勝手気まま、占領定着などの横暴をしないはずだ。その証拠にこの地球を襲った形跡はない。宇宙人は、崇高な倫理観を持っていると私は考えているが、今の地球人にそんな倫理観があるとは、到底思えない。人類は恐らく滅亡するその瞬間まで、ただひたすらに、我欲を突っ張り通す。救いようのない、幼児じみた生き物である。

芸術を讃え、人情を讃えて偉大な文明を築いた人類ではあるが、子孫に自慢して譲り渡せる、生存環境を整備し得たかという、必ずしもそうは言えない。未来のことはともかく、今の今を、どう、安楽に暮らせるかに重点が傾き、何万年後の生物全体の安全な生存方法など、誰が本気で考えているのだろうか？ 今からでも、遅くはない。

地球という水の惑星は、人類の活動のために、空気も水も甚だしく汚れた。汚した者は自分の責任で清掃する義務がある。人類の子孫の繁栄だけではなく、全生物が安全に暮らせる環境を整備して子孫にバトンタッチしなければならぬ。

調子込んで大袈裟なことを長々と書きまくった。思いつくまま起承転結も整わないまま、支離滅裂に書きなぐったが、ここまでこの乱文を読み進めて頂いた方には、心から感謝申し上げます。

宇宙人よ！ 教えてたもれ。人類のこの激しい競争意識。闘争心理。どうしたら、このむごたらし

い戦いを止めさせることができるか。人類皆が、諍いなく平和に暮らせるかを。そして宇宙人のような高度の倫理観を、どうすれば身につけられるかを……。地球人は、もっと穏やかな、極楽浄土に暮らす仙人達のように、欲はなく、いつも静かに笑顔を絶やささない。互いに手を取り合って、安穩に暮らしたいのです。どうかご指導下さい。

ギター文化館

2011 CONCERT SERIES

- 3月13日(日) 啼鵲タンゴトリオ(A.R.C.)コンサート
- 3月20日(日) 鈴木大介 ギターリサイタル
- 3月27日(日) パパサラ フォルクローレコンサート
- 4月10日(日) 小原聖子モデルコンサート& マスタークラス・ワルツン

※ご迷惑をおかけいたします。震災の影響で3月13日～4月10日までの公演を中止させていただきます。よろしくお願いたします。

- 4月24日(日) 莊村清志ギターリサイタル
- 5月 1日(日) 大嶋 芳ギターリサイタル
- 5月 8日(日) 國松竜次ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎ 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

『玉里御留川』の展示、講演会、本出版をしてから一年になる。私の力などは、ごくごく微力ではあるが、良いリーダーと仲間と四年間をかけた日々は生涯の宝物だと思っている。現在の霞ヶ浦を見ながら随分見方が変わったと思う。長い時間を息づいてきた自然と人間社会の姿を知ったことで、未来にわずかではあるが提言もしたい気持ちでいる。

川周辺で生きてきた人達の姿や思いを知ることが御留川にとりくんだ一つの目標でもあった。『コラム』としてのページを作る筈であったが時間的に無理だった。この機会に生かされずじまいの三つの話を陽の目を見る様にし、他に耳にした人々の姿も添えてみた。

明治生まれ お爺さんの話し

がき大将で子分共を連れて遊びほうけていた大正十年頃、高崎坂下の田と川は境なく凍った。石投げするにはかっこうの場所だった。転がっていく時の響きはよかった。遠く迄とんでいったもんだ。夏は泳いで向う場迄も行った奴がいた。俺は中間から戻ってきた。悔しかったが仕様がなかった。

昭和初めの頃小学生だったお爺さんの話し

俺は父親が具合が悪くなった時（夜が多かった）暖かくして舟に乗せて高浜の医者迄連れて行った。石岡迄行った時もある。村内には医者はいねえし、荷車も早かったからな。

戦争中に嫁に来たお婆さんの話し

実家でも百姓はやっていて慣れてはいたけど、嫁いできて百姓と漁の手伝いは辛かった。田畑の仕事が終わって堅い腰をあげ、重い足を引きずりながら家に向かう。川の水で農具を洗い、手足を洗うのはいつもの事、汚れをとって背中を伸ばすと、西の方に筑波が見える。夕陽に染まった水がきれいだった。しぜんと涙が出てくる。こらえようとすると余計に出て来て肩までふるえて声が出てしまう。さんざん泣いて水で顔を洗い流し何事もなかったように振舞が、誰かに見られたかと思ったりをきよろきよろするのが常だったよ。

昭和元年生まれのお爺さんの話し

おやじが弱かったから何でもやった。体は丈夫だったが田植え、稲刈りの頃は体ははらかった。何とか家迄は帰ったが、土間に入った途端に這いつくばって四本足で歩いたもんだ。漁もした。それぞれ縄張りがあったから向う場へは行けなかったが、たまには行く人もいる。「川は生きてんだ。甘くみんじやねえ」とよく年寄りが言っていた。天気の変化に対応できずに恐ろしいことになる。いくら大井戸さ戻ろうとしても舟はどうにもならなくなる。沖州、羽生、浜の方へ流されていく。死ぬじまう時もあった。助かる時もあった。とにかく炊きだしをしてひきとりに行くのに、部落中で手分けしての作業だ。助かった時はお礼の仕がいもあつけど、亡くなった時はつらかった。行く迄は解んねえから村中が急いでとつかかった。

終戦直後嫁に来たお婆さんの話し

喰うに困って川さ身投げした女が何人かいたな。おらも貧乏家に嫁に来た者んだが、自分から死ぬ

なんて絶対しねえと思っていた。水の中にも水辺にも何か生き物はいた。草や木の実もあったのにな。

終戦直後小学生だったお婆さんの話し

下高崎へよく遊びに行った。この部落に入ると魚の臭いがした。どこの家も漁とかかわる仕事をしてた。庭先のむしろいっぱいに魚が乾してある家、網を干してある道端、勝手場の方から煮ているにおい、ゆでている湯気、いけすに泳ぐ魚、魚の死骸を喰らう野良犬、猫、自転車で売りに行く人、川辺からてんびんで魚を運ぶ男の姿もあった。漁村だった。けんかあり、かけごとあり、勢いのよさは運動会で団結した応援とかけ足の速さだったよという。上級生がこぐ船に乗せてもらって、ひしの実とりに行ったこともある。

手記Ⅱ忘れられないイサザアミの塩辛

（田山森俊 昭和五年生まれ）

小生は戦前、浜松市内に十年くらい住んだ。敗戦の年の八月末、十七度に及ぶ空襲、艦砲射撃に遭い一面焼け野原と化した地を後にして、鹿島参宮鉄道浜駅から八木蒔（霞ヶ浦沿岸集落）にある親戚の家を尋ねた。所持品は、石油缶一つ。父が命懸けで持ち運んだ大事な書籍入れ。着の身着のまま、まるで後のベトナム難民そっくりであった。

親戚の家に着いたのは、うる覚えだが正午を大分廻っていた。当家の方にあいさつして、川風がよく通る座敷に通され、炊き立ての純白のご飯にイサザアミの塩辛が出て、夢中でよばれた。そのとき川魚の煮付け、漬物、味噌汁なども出された筈だが、六十三年経った今日でも思い出されるの

は、この塩辛のみである。

新鮮な材料で艶よく仕上がったアミは、その後今日までお目にかからない。近年は明太子の漬物が出廻っているが、このイサザアミの塩辛はそれ以上ではないかと思う。今でもときに夢に現れることもある。残念ながらことに持病があつて沢山はたべられないが。

九十歳ちかお爺さんの話し

夏の夜は昼間の暑さと野良の疲れでへとへとだ。早く寝たくても蚊んめがいて、うるさくて寝むれねえ。舟で岸を離れて涼しい所で寝んだよ。星見つと気持ちいいこと。夜風の歌聞きながらあつという間に寝ちまうよ。だけど一人よりは彼女と一緒にならいんだけどと思つたもんだつた。しかしあの小さな虫めらも今はいなくなつたな。どこへ行っちゃつたのか。

八十代に入つたお爺さんの話し

夏は若くたつて疲れたよ。だからつて家にじつとなんかしていられなかつた。何人もで連れだつて向う場へ夜遊びだ。勿論向う場からこつちへもきたよ。若いっちゃいいな。

聞き書き 川と共に生きてきた

(原田さん 昭和十二年生まれ)

母親が亡くなつて父親と三村へ移り住んだ。その時A(後に問屋の主人になった)も一緒だつた。そこで竹細工の仕事をした。その後三人で高崎に移つた。高崎は漁が盛んだつたから問屋も漁師も駕籠やざるが必要だつた。よこた、ぼてざるなどが注文が多く、わたしも十五、六の時には一人前で

活躍していた。

所帯を持つてからは漁中心にやつていった。漁はいろいろな方法があつてなんでもやつてみた。さきりよう、さきがけ、おだりよう、さしあみ、はりあみ、とあみ、たてあみりよう、大毒など教えてもらつたり工夫してみた。

自分の家の庭先が川で舟をつないでおける。場所は高崎近辺が多かつた。石川の方は漁をしている人が少ないので行きやすいといつて出かけた人もいる。高浜にもかけてもいいが、高浜の人もかけているので愛きよう橋あたりまでとつていた。平山の方へも出かけてしたが「こつちは大井戸の分だ」と言われるとすぐ止めた。大げんかになるようなことはなかつた。川の真中の漁は全くだめだつた。八木、大井戸を過ぎると川幅が広く感じが違つた。舟をみてもらうのに麻生の造船所に行く時など波がたつて小さな舟では怖かつた。問屋に魚を持つていくのが普通だが、仲間買いをしていた人もいた。

網是那珂湊の業者がきたり、こつちから買いに行つたりした。新しいのを求めたり、物によつては海で使つた中古品も買えた。網は上の方がいたみやすいの上を切つて縫つたりした。網は腐つたりいたみやすいので、柿渋で煮た。四十四、五年迄どの家でも煮ていた。だから玉里は渋柿が多いんだ。

税金は年二回に支払う。舟の大きさ、数、網の大きさ、種類を届けてそれによつて決まる。

干拓問題、堤防、石岡台地用水といろいろなことがあつたので辛かつた。言葉少なく表情で訴えている姿がわかつた。体をこわした後は漁をやめた。でもこの川と一緒に生きてこられたことを

ほこりとしているよと最後に言つていた。

七十代の女の人の話し

漁をすんのにあたり前にとつてはだめだ。少しでも多くとつて金にすんだよ。「だめだつてこともしたよ」「悪いこともしたよ」と笑つていた。

昭和四十年代の話し

みんな川と一緒に生活しているから、かわを知つているつもりでも時々恐ろしい事故があつた。深つぽ付近には近寄らない事になつていたが、溺れている小学生を助けようとして高校生が亡くなつた。近代化の中で川が変わろうとしていた頃だつた。

聞き書き

変化する湖で生活してきた私(漁師の女房として)

(一)

農家で育つたわたしは卒業後、家を離れて寮生活の勤めに入った。仕事はメリヤス工場、朝早くから夜遅くまで沢山の人たちとの生活だつた。

昭和三十七年二十五歳で高崎の漁師の家に嫁いできた。夫は二歳年上。漁は全く経験のないことで大変な思いをすることになったが工場での苦労を土台にして頑張つた。勤めていた時のミシンの経験は漁に必要な用具を作ることにとても役立つた。例えば「あげ」(網に入った魚を寄せるもの)を作るのにミシンの作業は役に立ち珍しがられたし、出来映えもよかつた。作つて欲しいという人もいてよく作つてあげた。喜ばれたときは嬉しかつた。漁が主な生活で、大風でない限りは毎日川に出かけた。一緒に舟に乗つて出る時もあったが、家

のこと、子供のことを一段落させてから主人の所へ行って魚を網から舟に移した。沢山入る時と少ない時があつても、問屋へ持つて行く足は軽く明るい気持ちだった。代金はまとめてひと月払いだつた。

嫁いできたばかりの頃は何でもよく捕れた。鯉、鮒、雷魚、鯰、鰻、白魚、ゴロ、エビ、タナゴなどで、ワカサギはわたしらの網には入らなかつた。シジミ、タンカイ（鳥貝）は岸の近くで捕れた。

主人はいろんな用具を工夫するのが得意で、鍛冶屋へとんで行つてはこしらえて貰つていた。烏貝採り具など重宝だつたことを覚えていて。普段の生活、漁業、野良仕事もよく教えてくれたが「教えるのは一回だけ、よく聞いておけ」と言つて二度とは教えてくれなかつた。苦勞もしたが努力したり工夫もし、根性もついていった。

(二)

魚の調理で工夫したことも沢山ある。

・雷魚：煮ても美味しかつたがフライにしてもよかつた。あらいいつくり、酢味噌で食べるのもよかつた。

・鯉：あらいい、酢味噌もわさびの粉をといて入れるとこれまたよかつた。煮付ける鯉は旨煮とした。鯉こくは二十センチ位の鯉一匹をこけらを取らず（はらわたはとる）甘く煮つける。お産の時はそれを食べると乳が出るようになるから必ず作つてもらつてたべたものだった。漁師は舟に乗るんだからミルクなんかもつて舟に乗れない乳がしつかり出るようにしなければだめだといわれよく食べた。

・鯰：煮るのが主だつたが、南蛮漬けは美味かつた。

・鮒：骨が細かいので味噌汁はすするように飲むことだと注意された。甘露煮は焼いてから煮た。細かなものは昆布巻きにした。

・鰻（たなこ）：ホンタナゴは細いから昆布巻きにした。

ほかにもいろいろ作つた。シジミ汁、タンカイは切干と煮た。ゴロの佃煮、えびの佃煮。白魚は酢をつけて食べた。

捕れたものは殆ど問屋に持つて行つたが家に帰ると近所のおばさんたちの茶のみのおかず、夕方は主人のともだちの酒のつまみにと毎日のように調理した。自分で食べるより食べてくれる人が評価してくれることを励みにして魚と向かい合う生活だつた。

(三)

昭和三十年代、堤防が出来、やがて川が汚れてきたのか魚がとれなくなつて、五十年代中半頃商売にならなくなつて漁はやめた。主人は農業に変わり蓮根を作つた。蓮根洗いの動力化は主人が初めて考え出したものだ。ホースに鉄製のノズルをつけ、エンジンをかけて水を噴射させ、その勢いで洗う方法だつた。特許を取つたらと話したこともあつたが、そこまでするひまもなかつた。

私はしばらくぶりに勤めに通うことになつた。隣の会社だつた。大勢の人間関係にもうまくいくように努力し、仕事の能率を上げられるよう頑張つた。主人が教えてくれた厳しさがわたしをささえてくれると有難く思つている。病で倒れた主人は「勤めをやめたら旅行に行け、友達と楽しくやれよ」と言つてくれた。六十歳で勤めを辞めた。若い時の勤めの辛さと親の教えを忘れずにがまん頑張りでつらぬいてきた私だつた、と思

う。

（大槻たき 昭和十一年生まれ）

御留川の一地域の、数人の話しにすぎませんが、豊かなものをいただいたように思う。みなさんたくましく生きてきたと感じた。自然とかかわり合つて生きてきた姿だつた。そこになにかを感じていきたい。これからも御留川周辺で生活してきた人に耳を傾け、目を向けて、語りかけていこうと思つた。

平城遷都一三〇〇年正倉院展（法師 道鏡）

兼平ちえこ

当会報の前月号（五七号）より、昨年開催された正倉院展において印象深かつた展示品を紹介しています。

総計七十一件の宝物見学、後半には奈良時代の社会生活を伝える古文書類、仏教文化を示す写経など多数出展されていた。その中で法師道鏡の自筆の文書に見入つてしまった。二点ほどの自筆の文書は、天平宝字六年（七六二）、六月七日付孝謙上皇の命を受け、東大寺一切経司所に対して、一切経目録の貸出を求めたもの。そして翌年の天平宝字七年三月十日付は孝謙上皇の命を受け造東大寺司の写経所に「金光明最勝王経」十一部など七三二巻の写経を命じたものであつた。これら道鏡の筆跡は、力強く、揺るぎのない線、何事にも動じない、心の広さが感じられた。

道鏡は山林修行して験力を身につけ、梵文をほぼ理解し、禅行をもつて知られた。天平宝字六年（七六二）四月、近江国の保良宮で孝謙上皇の病を

治したことで上皇の寵愛を受け藤原仲麻呂を倒すと大臣禪師↓太政大臣禪師↓法王という前例のない高い地位につき、称徳天皇（孝謙上皇重祚）とともに仏教重視の政策を展開した。そして天皇の位を望んだが果たせず、称徳天皇が崩御（七七〇年八月四日、五十三歳）すると力を失い、下野国の薬師寺に左遷された。

下野国務志の薬師寺は、常陸国に近い為、茨城県内の各地にも多くの伝説が語られている。これからの伝説は旧美野里町竹原（小美玉市竹原）に伝わってお話です。

まず、今東光著「弓削道鏡」をのぞいてみることにしましょう。法師道鏡こと弓削道鏡は、先祖代々、物部氏（天和朝廷で軍事、警察、裁判を担当した品部の末裔の職である、河内国、弓削郷の弓削部（天和朝廷で弓の作製を担当した品部）一族の家に生まれ、名を道彦と言う。道彦は平城の都で法師としての出世の野心を抱き出奔する。その都で、時の帝と皇后様が阿部内親王（のちの孝謙天皇）を御召し連れての行幸の行列の中に随行していた良弁法師に何回かの拝謁の申し出のすえ、道彦の刻んだ如意輪観音菩薩像の因縁により、認められ良弁法師の師である義淵僧王の弟子になる。まもなく義淵僧王の御手によって出家剃髪し法名を道鏡と給わり、厳しく育てられた。のちに、『一日も早く山林に隠れて苦修練行せよ』とさとされるのであった。

では小美玉市竹原に伝えられるお話に戻ります。六号国道、水戸に向かつて、石岡市と小美玉市の境あたりの花野井川にかかる花野井橋と菌部川にわたる菌部橋を越えたと信号のある竹原の交差点を右に折れる。間もなく右側に竹原椿山稲荷神社がある。

神社内、右側奥に小さな祠が西向きに鎮座している。その道鏡様についての案内板の語るには、奈良時代の高僧である道鏡禪師は時の権力者からねたまれ悪僧とされ、下野国の薬師寺に左遷され、その事を知った竹原の人びとは道鏡様をお呼びして、ここに住んでもらうことにした。それは竹原の人びとが都で訴訟事をした時、道鏡禪師の計らいで事がうまく済んだので、そのお返しのもりだった。以来道鏡様と慕われ、特に安産や商売繁盛の神様として、参拝客が絶えなかったということであった。そして現在も土地の人たちに、あたたく守られているそうである。

そしてこの地には道鏡様と向き合うように六号国道を挟んで丁度、菌部橋と花野井橋から望むと、西側の高台に孝謙天皇宮が鎮座している。そこは、六号国道竹原交差点より一・五キロ位の所である。

孝謙天皇宮の案内板によると、孝謙天皇を祀る無格社で、創建年代については明らかではなく、伝説によると、竹原に移り住んだ弓削道鏡が寵愛を受けた孝謙天皇を忍んで建てたといわれ、社殿の他「御陵」も築いて毎日礼拝したとつたえられている。

元禄十三年竹原が守山藩の領分になると藩主も信仰厚く祭日には役人を出張させて祭りを行った。祭日は八月四日（生涯独身で過ごされた帝の御霊をお慰めするため、御命日に奉納相撲が行われるようになったと語り伝えられている）であったが後には九月四日となり、必ず奉納相撲がおこなわれ、近くを散歩していた人に聞いた所、平成の現在でも、相撲は行われているそうである。

かつて、近くに岩屋権現古墳があったが（これについても伝説あり）、貞享年間頃（二六八五）、この塚が

毎夜光を発するので農民が発掘したところ、石棺の中から剣・鏡・玉を発見し、持ちかえって玩具としたところたちまち、眼病になり失明、驚いて孝謙天皇宮に奉納したといわれている。その後孝謙天皇宮は火災により焼失したが、今でも焼けた玉と鏡と伝えられるものが竹原神社（六号国道竹原交差点から孝謙天皇宮に向かつて間もなく左側高台に鎮座）の宝物庫に保管されているという。

如何ですか。奈良の都での孝謙天皇と道鏡様のいつの世までも続く深い愛と仏教重視の政策の尽力を思いながら竹原地区に残る歴史を訪ねてみませんか。

最後にもう一度今東光著「弓削道鏡」最後の一部分を抜粋します。―薬師寺別当の道鏡は下野から常陸、下総、上野、信濃と遊歴した。法王の栄位を失っても惜しいと思わなかった彼は、女帝と愛子を失ったことだけは惜しんでもあまりあった別当は物言わぬ人になった。常陸の石岡に遊んだ時、国司の方に仕える女が別当の貴い身体を温めるために、傍らに寝た事があった。ただ一夜の情であったがこの女の腹から弓削氏の裔が生まれたと伝えられている。道鏡は宝龜二年四月七日、下野の配流地で死んだ。その死は別当の格式でなく、庶人の礼をもって葬ったと国司は言上している。

（完）

参考資料 平成二十二年正倉院展
島田 助左衛門氏 記

・青空にふっくら夢捧ぐ桜

ちえこ

ひな祭りの日、つくばカピオに白石加代子さんの朗読劇「百物語シリーズ」を観に行ってきた。中高年の女性の方が大勢来ているのにビックリしました。

私は、白石さんの朗読そのものを聞くことはできませんが、朗読の時の表情や朗読しながらの立居振舞：演技に迫力を感じた。白井先生の話しでは、朗読そのものには往年の勢いがなくなっており、それに対応した工夫が十分にできていないと話されていますが、今回の朗読劇では話の内容にもよりますが、初めて見たときのような衝撃的な魅力はかけていたように思いました。

でも白石さんの「百物語」は今回が九十四話まで来ていましたので、あと六話で達成です。来年には百話になるのではないのでしょうか。

私の常世の国の恋物語百は現在二十六話。6月の公演で二十七話。まだまだ先が長いけれど、白井先生には頑張ってもらって、百話達成に向けて頑張っていきたいと思っています。

6月公演では、2月に共演させていただいたモダンダンスの柏木久美子さんが、常世の国の恋物語百にも共演していただけるとの事なので、今から張り切っております。

6月公演の演目はまだ決まっておりますませんが、先生の構想ではどうやら「流海(うみ)の舞」のタイトルで、縄文人の恋物語になるようです。3月末までには脚本が完成するそうですから、楽しみに待っています。

柏木さんと、ギター文化館でどんな舞がお見せできるかこうご期待です。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第一章 文字と歴史(後編)

ここで思い付くのが、先に述べた常陸国における建借間命の活躍である。建借間命は遙々と九州から東国の平定に来て常陸国で定年を迎え、自分が開拓した水戸近辺に住んで年金暮らしをしたのだが、鹿島灘沿岸部は塩と砂鉄が採れるから権益として株を持っていた。国が安定してきて株価も上がり資金が出来た。そこで神話の世界で功績があった御先祖の武甕槌命を祀る神社を創建して、その神社には自分の名である「鹿島」を付けた：とは考えられないであろうか。創建時から鹿島神宮の神官を務めていたのは同系の鹿島氏である。

その建借間命について、古事記では「神八井耳命(かむやいみのみこと)の子孫としている。いつの頃からか此の神様は「耳鼻科専門」の神様にされて、石岡近辺では小美玉市(旧・玉里)に耳守神社として祀られているが、それは名前に「耳」が付くからで耳鼻科が専門では無い。勿論、神様であるから頼めば耳も診てくれるであろうが、本来は神武天皇(実在したとして)の嫡男であり大学も医学部ではなく政治学部を目指した。母親は三和太物主神(みわのおおものぬしのかみ)の娘とされる勢夜陀多良比売(せやだたらひめ)であり神武天皇の正室(初代・皇后)になる。

大物主神は、石岡にも在った龍神山の「蛇神伝説」に深い関わりのある神様で、有名な日本最古の箸墓古墳にも関係する。現代で言えば古代の近

畿地方を支配していた大豪族である。酒造、窯業、鉄鋼業など手広く事業を手掛けていた。石岡市内の金刀比羅神社にも祀られている。序に言えば耳守神社は石岡市にも在ったのだが、常磐高速道を通す際に邪魔だと退かされた。龍神山にしても耳守神社にしても、石岡市は三輪山系の神様を粗末にする。それでいて幕末から明治・大正にかけて「酒造り」で町を繁栄させていたが、恩知らずが分かったから神様は石岡を見放したのである。

愚痴は止めて話を戻すと、神八井耳命は父方の神武家と母方の大物家の血筋を受けた嫡男として大和王朝を継承する立場にあった。古事記には「神武天皇は百三十七歳で死んだ」と書いてあるから、長寿時代でも羨ましい現代人は誰も信用しないのだが、それはともかく、神武天皇のお葬式で会堂の遺族席に並んだのは正室の勢夜陀多良比売と三人の息子、側室の阿比良比売と二人の息子である。側室の子は二人とも成人に達していたが、正室の子三人は未だ高校生か中学生であつたらう。お葬式が済むと、世間並に相続争いが起こってくる。一般の財閥と違って皇位継承権があるから争いも熾烈を極めることになる。

この場合は、嫡男の神八井耳命が神武家を継ぐのが順当なのであるが、庶出の兄である當藝志美美命(たぎしみのみこと)が立候補に意欲を見せた。現代の三流政治家のように、早くから事前運動を展開すれば良いのだが、當藝志美美命は面倒なことが嫌いだ。義母である勢夜陀多良比売を襲い強引な手段で自分の妻にしまった。つまり亡き天皇の長子が皇后の夫になった訳であるから、深く考えなければ次の天皇には一番ふさわしい(と思う他はない)——これで決まり…。

ところが當藝志美美命は、野心家のわりには単純な馬鹿だった。自分の地位を万全にするために神八井耳命ら異母弟三人を殺そうとして、そのことを勢夜陀多良比売に相談したのである。ドラマだと三人の子が次々に消されるところであるが、勢夜陀多良比売は同意する振りをしつつ、時間稼ぎをして子供たちに危機を知らせることにした。しかし當藝志美美命の目があるから電話も掛けられず手紙も出せない。携帯電話は未だ無かった。そこで勢夜陀多良比売は「NHKのど自慢に出たい」とか何とか口実を設けて、急に歌の練習を始めたのである。楽器が無いからアカペラで：

狭井川よ 雲起ちわたり

畝傍山 木の葉さやぎぬ

風吹かむとす

畝傍山 昼は雲とる(雲が動く)

夕されば 風吹かむとぞ

木の葉さやげる

今までに母親が歌うことなど全く無かったから三人の子は不審に思い、歌詞を聴き分けた。畝傍山に怪しい気配が起りつつある―何か異変が起りそうだ：警告の意味を歌詞に察した三兄弟は自分たちが相続争いの渦中に居ることに気付いて何とかこの危機を乗り越えようと相談した。家臣たちは敵か味方も分からず、相手が自分たちを殺そうとしている以上は、先制攻撃を仕掛けて當藝志美美命を倒すしか勝つ手段は無いと決めた。三人の少年は、大人たちから聞いていた手柄話を思い出し、それを参考にして深夜に當藝志美美命を襲うことにした。自分たちが持っている太刀だけでは心細いので、武器庫の番人に酒を与えて眠らせ矛(ほこ)を持ち出した。三男の日子八井の

命は身体が弱かったので見張り役に回り、神八井耳命と次男の神沼河耳命(かみぬなかわみのみこと)とが暗殺役に回った。

其の深夜に兄弟は警護巡回の兵が去った隙をついて宮殿に侵入した。敵は熟睡していた。先ず神八井耳命が矛を構えて當藝志美美命に迫ったのだが相手は庶出の兄であり、現在は実母の夫でもあるから、思わず気持が躊躇(ためらって)矛を突き出すことが出来ない。それを見た神沼河耳命は、兄から武器を奪い一気に敵の心臓へ突き入れた。暗殺成功！、三兄弟は母親に事情を説明し「當藝志美美命は外因性心臓麻痺により急死」と言う医師の診断書を貰って始末した。

神八井耳命は皇位を神沼河耳命に譲り「自分は兄であるが仇敵を殺すことが出来なかった…それを恥じて以後は臣となり、天皇に奉仕しよう…」

と言つて民間に下り大学で勉強した。その子孫が建借間命であり、古事記を現した太安萬侶であり、主として九州、四国などに子孫が広がった。神沼河耳命が第二代の綏靖(すいせい)天皇になる。

此の事件は近畿大和王朝の出来事にされているけれども、神八井耳命の子孫として古事記に記載されている中で多いのが九州方面の国造(くにのみやつこ)であり、常陸国の開発を行った建借間命系統の人物であることから推定すれば、九州王朝内に似たような事件があつて古事記の作成を命じられた太安萬侶がページを増やすために、その話を採り入れたかと疑いたくなる。

神武天皇はともかく、大和王朝が頭角を現わすのは七世紀に入ってからのことらしいので、風土記に記載された古い時代の大和王朝には、建借間命らの九州部隊を関東に派遣する国力が有ったと

は思えない。やはり建借間命は九州王朝から派遣されたと考えるのが筋であろう。「古事記は神武王朝に都合の良いように改竄された」とする説に従えば、そのように解釈できる。

古事記の参考書のような「旧事本紀(くじほんぎ)」にも諸国の国造(くにのみやつこ)初代の畠知事(はたけち)を紹介していて、仲(那珂)国造・建借間命は伊予国造と同じ祖先と書いてある。さらに伊予国造は因幡国造と同じ祖先としているから建借間命は九州王朝に吸収された因幡系＝出雲系であることを示唆しているようにも思える。

一方で鹿島神宮を創建したのは藤原氏とする説もある。藤原氏が祖先とする中臣系も「神八井耳命」の後裔とされているが、本来ならば藤原宇合が「常陸国風土記」を編纂するに際して集めた常陸国内の征服物語からは九州王朝の影を残す建借間命の活躍場面「杵島曲」の部分を削除すべきであつたらう。ところが「建借間命は神八井耳命を祖先とする人物である」と、既に古事記に記録されていたため、藤原宇合は「さりげなく中臣系藤原氏の功績を書き残す」という藤原一族の根本方針に眼が眩(くら)んで同族意識に惑わされ「杵島曲」が九州の歌であることに気付かなかつた？

建借間命は行方・鹿嶋地方から霞が浦湖岸一帯を征服して常陸国の中央部を流れる大きな川の流域に定着し、その地を統治の基盤とした。川には自分の故国で有る九州の川の名「那珂川」を付け、国名も那珂(那)国とした。仲国の領域には、初めに常陸国の開拓に着手した出雲系の武将たちが拠点としていた友部の小原(うべの)地区なども入っていた。この地は出雲系の衰退により一時的に仲国(那)に編入されていたが、九州王朝も滅び近畿

大和王朝が日本の王朝として統治する段階で常陸国の国府を置くために仲国の一部が戻されて茨城国(郡)に編入された。そして常陸国開発事業の中心であった「うばらの里」に新たな行政の中心が置かれる予定であった。しかし、その地域は何分にも手狭である。他に適地は無いのか？

土地開発公社が推薦をしたのは霞が浦を望む未開の台地である。筑波山や霞が浦は近く恋瀬川の流れも美しい。交通便利、風光明媚であるが未だ知名度が低かった。結局、値段を上げて買い「うばらの里」が移され茨城国の庁舎が建設された。

その説なら龍神伝説を持つ常陸国風土記の「嘯時臥(くれふし)山」が石岡の龍神山と那珂川近く(水戸・笠間・城里の堺)の朝房山に在ってもおかしくない：龍神山は消されてしまったが…。

国造記事のある「旧事本紀」と言う古書は徳川光圀が「怪しい…」と見ていたらしいが、諸国の国造については其の出自を示してくれている。後の時代に書かれた諸家の系図も大方は偽物らしいから鱸の頭と同じで其の俣を信用するしかない。それより私は此の史料が「常陸国風土記・茨城の郡」の冒頭に書かれた「国巢(くさう)山(の)佐伯野の佐伯」の話の中で「茨城」の名称の元となった記事の注釈に触れていることに注目したい。

国巢の話は、藤原宇合が父親の意図に沿って一族の先祖の手柄を誇示した場面と言われる。中臣系・太臣(おのおのみ)である黒坂命(くろさかのみこと)が、穴居生活をしていた原住民の外出時を狙って穴の入り口を茨で塞ぎ、騎兵を放って追い詰め、傷つけ、征伐するという。退治された理由は「自分たち征服者に馴染まず、風俗習慣が違ふ」と言うだけのことである。先住民を理不尽に追い出

した外来民族の非情さを象徴する物語であるからこれを以て「茨城」の地名発祥などとは言いたくない。「うばらの里」の名称移動のほうは平和的であるが、それはそれとして、この話は先に述べた建借間命の征服物語の書き換えであるように思えてならない。「うばらの里」に置かれていた茨城郡の庁舎を移し、さらに常陸国となるため新庁舎を建設する場所が「単なる荒地」の跡では面白くない。そこで行方郡に残る建借間命の武勇伝を元にして「茨城」の話を創作した。

「茨城」の謂れの後には小さく書かれているのが初代の茨城国造とされる筑紫刀禰の系統で、始祖の天津多祁許呂命(あまつたけのりのみこと)に触れている。多分、この一族は藤原氏に関わりが無かったであろう。しかし実際の国造として赴任した記録が有ったから藤原宇合も無視する訳にもいかず常陸国風土記の黒坂命の武勇伝の後に小さく記録した。その内容は「天津多祁許呂命が応神天皇時代に仕えて、後に茨城国造になった筑紫刀禰など子供が八人居り役人として勤めた」と言うものである。応神天皇の時代というのは疑わしいが、旧事本紀によると多祁許呂命の子供たちは次のように国造として就職したらしい。

- ・筑紫刀禰(つくしとね) — 茨城国造
- ・意富驚意彌命(おおほしおみのみこと) — 磯長国(いなぎのくに) — 平塚市付近
- ・大布日意禰命(おおほひいねのみこと) — 須恵国造(すゑのくに) — 秩父市付近
- ・深河意禰命(ふかがわいねのみこと) — 馬来田国造(むまきだのくに) — 君津市付近
- ・児屋主乃禰(こやぬしのね) — 道奥菊多国造(みちのくさくた) — いわき市付近

・宇佐比乃禰(うさひのね) — 道口岐閉国造(みちのくさへ) — 日立市付近

・建彌依米命(たけみよりのみこと) — 石背国造(いせのくに) — 須賀川市付近

そして多祁許呂命については石城(いわき)国造になったとしている。

茨城国造の筑紫刀禰は天津彦根命(あまつひこねのみこと)の孫とされているが、孫よりもさらに子孫とも考えられる。そのまま解釈すれば天津彦根命 — 天津多祁許呂命 — 筑紫刀禰などと言うことになる。天津彦根命は神話による由緒正しい出雲系の人物である。これらのことから、出雲王朝時代から茨城国(郡)は北方開発の拠点として重視されていたことが分かる。後に石岡が東海道の東端に置かれたのも、それなりの理由があるので、任務の重大性が増すに伴って友部付近の山地から霞が浦沿岸に郡衙(ぐんが)が移され国衙(こくが)になっていく過程も理解できるのである。

「猫に小判」の例えで、貴重な学説に接しながら浅学不肖の私はその本質を理解することが出来ず申し訳ないのだが、おぼろげな理解で言わせて頂けば、九州王朝は出雲王朝の後に一世紀から七世紀ぐらいの日本を支配していた。多分、百済系の王朝と推測される。少し遅れて同じく九州を起点とする大陸系の一派が東へ進み、近畿地方を侵略し定住した。それが「神武天皇」に仮託される指導者を擁した「大和族」である。

近畿大和族の王朝が九州王朝に属していた期間には不明であるが、九州王朝は大陸諸国との外交政策に失敗し、従来は齋明天皇や中大兄皇子が仕掛けたとされる西暦六六三年八月の「白村江(はくすきのえ)の戦い」で唐と新羅の連合軍に負けて滅び

たらしい。かねてナンバーワンを狙っていた近畿大和王朝は、敗戦のドサクサに紛れて「天皇制による大和朝廷」を建てたと言うことになるのか：或いは、要領良く唐の国に売り込んで日本統治を任されたのか：ともかく、ここで「大和朝廷」が日本を代表する国として登場した。しかし、その大和朝廷さえも「万世一系」どころか「二世万系」の醜い相續争いを繰り返している。

最も建国が古い出雲王朝時代には未だ文字が無かったと思うのだが、九州王朝や近畿大和王朝の時代には文字を使用していたであろう。大和王朝の場合、九州王朝の滅亡に際して国造り神話などを盗作した疑いもあるらしいが、此処は騙された振りをして伝えられるところに依れば、漢字による記録は「帝記」「旧記」「本辞」などと呼ばれ天皇家、つまり大王家の公式記録として保存されていた。ところが、西暦六四五年に起こった内部クーデターで故意か過失か知らないが公式な記録の多くが火災に依り焼失してしまった。クーデターは権力の交代であるから其れまでの歴史は捨てられたり焼かれたりする運命にはあるのだが：辛うじて一冊だけは誰かが素手で揉み消して焦げ目はずいたが部分的に残った。

このクーデターで滅ぼされた王朝は「蘇我王朝」であった。是までの歴史では、天皇を軽視し権力を振るった悪人にされているが、王様ならば権力を振っても仕方がない。「滅ぼした側が善で、滅びたほうは悪である」とする理屈は、余程のことが無い限り、そのように伝えられるであろう。

何処の国でもクーデターを起こした場合には、その本人がトップになるのが定番であるが、中大兄皇子こと天智天皇は「執政」として政治には関

与していたが、十何年間も皇位に就かなかつた。権力基盤が弱く皇位に就けなかつたと言われる。是だけでも「王権奪取のクーデター」だと思われる要素は十分である。代わりに母親の齋明天皇が王位に就いた。この女帝は、無駄なダムや道路を造つたどこかの国の某政党のように公共事業が好きで、国民の苦しみを余所に多額の税金を使い訳

の分からない土木工事を推し進め「狂心の渠（たわむれごころのみぞ）」と人々に罵（ののし）られるような巨大な石造品を飛鳥に残している。その為には執政の天智天皇も評判が悪かつた。

従来の説では、白鳳元年（六六二）の正月早々に齋明天皇は朝鮮半島へ兵を出したことになる。百済王から要請されて新羅と唐の連合軍と戦う為である。大本営を四国から九州に遷して福岡県中西部の朝倉に行宮（あんぐう）宮を建てた。

その時に大好きな工事用材として朝倉神社の神木を切つてしまった。そのために天皇の側近たちが次々と病気に罹り、天皇自身も七月に神罰で命を落とした。この話は、当時の天皇の権威が地方の神にも及ばないほど弱いものであったことを示唆しているし、大和王朝が九州王朝の命令で出動させられたことを暗示している。

齋明天皇の死により天智天皇が皇位を継いだ。

天智天皇は、舒明（じよめい）天皇を父とし皇極天皇（齋明天皇）を母として生まれた。天武天皇は同母の弟で、同母の妹に間人（はしひと）皇女がいる。そして、もう一人の兄、蘇我氏の血を引く母を持つ古人大兄皇子（ふるひとのおおえのおおうじ）がいた。この人はクーデターの後に皇位に就くように言われたのだが身の危険を察知して断り僧侶となって吉野山に引退していた。それでも強引に謀反

の罪を着せられ早々と肅清された。

「大化の改新」と言うクーデターの直後に天皇の地位を押し付けられたのは、皇極（齋明）天皇の弟である孝徳天皇で、后妃は間人皇女である。母親は間人皇女では無いが孝徳天皇には優れた人物の有間皇子がいた。中大兄皇子が皇位を辞退してしたのであるから、通常ならば孝徳天皇の跡は有間皇子が天皇になるべきであるが、そこは陰湿な権力争いの世界、有間皇子も成人してくると命を狙われる危険が増す。防衛本能で狂人の真似をして温泉巡りをしていただけでも中大兄皇子の腹心が謀略を仕掛け、謀反人として連行され絞首刑に処されてしまった。この人が遺した辞世の歌は万葉集の名歌として知られる。

「家にあらば筍（ひ）に盛る飯を草まくら旅にしあれば椎の葉に盛る」 筍（ひ）食器

「磬白（いわしろ）の浜松が枝を引き結びまさきくあらばまたかへり見む」 まさきく（好運

中大兄皇子は用意周到に周囲を肅清してから天智天皇として、初代の皇位に就いたのである。

九州王朝説によれば、齋明天皇と中大兄皇子とが九州に出陣し、日本軍が朝鮮半島の白村江（はくすきのえ）で唐と新羅の連合軍に大敗を喫した出来事は「九州王朝の滅亡」であるとす。大和王朝は、九州王朝の命令に従つて九州まで出てきたが、そこで日本軍の敗戦を知つた。或いは戦場まで行つたけれども逃げてきた。主力の九州軍は壊滅状態で九州王朝は消滅同然であるから、敵との交渉を含めた敗戦処理は下部組織の大和王朝が代理で担当することになる。

昭和二〇年の時と同じで中国（唐）の軍隊が朝鮮（新羅）の軍隊が日本に進駐してきた。日本全土は

抑えられないから、九州に進駐して筑紫にGHQを設置し、細かなことは大和王朝に任せた。「大化の改新」と呼ばれるクーデターで蘇我王朝を滅ぼし、大和王朝を代表する立場にあった中大兄皇子には絶好のチャンスである。九州王朝の代行として此の国を支配することになったが、九州王朝は国家の機能を失っている。自ら天智天皇として即位し日本全土を支配することになった。

中臣鎌足（なかとみのかまたり）と言う協力者も居て中大兄皇子こと天智天皇の計画は順調に進んだのだが、予期せぬ欠陥が見つかった。それは国家として出発するに当り、自分たちの王朝が正統な支配者であることを国民に示す証拠に欠ける―前代の王朝から奪った！という印象が拭い切れないことである。第一に国としての歴史が無い。やっと覚えた文字で記録していた王朝史の大半が強引なクーデターの所為で焼失したからである。天智天皇は「これを何とかしなければ…」と思いつつも親会社との関わりで多忙を極め、また即位してから僅か三年で他界したこともあって国史整備の実をあげることが出来なかった。

天智天皇にとつて、さらに都合の悪いことには後継者の座を巡り息子の大友皇子と、弟の大海女皇子（兄とする説もある）とが対立したことである。大友皇子は頭脳明晰な人物であったと言われているが「壬申の乱」つまり両者の後継争いに敗れ、エジプト王朝に於けるツタンカーメンと同じく皇統から削られてしまった。大友皇子を天皇として復活させたのは水戸光圀であると言われる。

天武天皇は、天智天皇の遺志を継いで日本国の歴史を整備させた。先ず「日本書紀」の編纂を行わせたが何しろ国家の正史であるから、下手なこ

とは書けず、さりとて隠す部分が多いと記録の役目を果たさない。もう一つ障害となったのが皇位争奪の事実である―それを何処まで記録するのか：天武天皇は壬申の乱で不利な状況を打開するために伊勢、美濃、尾張などの豪族に力を借りた。その結果、伊勢地方に居た豪族たちの氏神に過ぎなかった伊勢神宮の権威を異常に増大させることになり、歴史上でも天照大神と天皇家とを一体化させるような観念をこの国に齎してしまったが：それをどの程度、記録するのか？

当然ながら古代からの伝承は天武天皇ラインで創作された物語になるのだが、日本書紀はその選択に時間を空費していた。その間に天武天皇も死に持統天皇、文武天皇、元明天皇とトップが代わり、その都度、方針も変わって日本書紀の編纂作業は大きく遅滞してしまふ。

これを何とかしなければ…と気付いたのは国分寺を建立させた聖武天皇の祖母・元明天皇である。この女帝は天智天皇の娘で、母親は蘇我王朝の血筋鷲鸞良天武皇后で持統天皇となった皇女（うのささらこうじよ）は姉であり姑でもある。夫の草壁皇子（天武帝の皇太子）には文武天皇、元正天皇ら三人の子を残して先立たれた。息子の文武天皇も二十代で早世し、その遺言で皇位に就くことを懇願されたのだが、その任では無いと固く辞退していた。

しかし天皇の死により、止むを得ず即位することになり、そのことを宣命（せんみょう）即位の言葉に述べ皇統の維持に触れている。「万世一系」で継承する考え方はこの時に出来たのであろう。思慮の深いしつかりした女性のようである。この天皇の時代に都が平城京に遷され日本が国家として中

央集権を推し進める為の形が出来上がった。元明天皇自身は「何も無理して都を遷さなくても良い」と考えていたのだが、藤原不比等が強引に遷都を決めてしまったらしい。それまでは無かった「天皇」という支配者の存在が未だ国民には良く知れ渡っていない。それを周知させるためにも壮大な都が必要になったからである。

既に律令制度が施行されている。後は天皇が絶対的な存在であることを記録に示さなくてはならない。遅滞していた日本書紀編纂事業の再開に右大臣の藤原不比等が当ることになった。正五位の中級官僚・太安萬侶（おおのやすまろ）は、以前から天武天皇の家来の息子ではあるが、既に述べたように神武天皇の跡を継いで天皇になるべきところを事情が有って臣下となった神八井耳命の後裔の一族に当る。九州王朝の生き残りだったような気がしてならない。

太安萬侶は藤原不比等による日本書紀編纂事業の再開に喜んだのだが、そう簡単には完成しないと予想して密かに別な形で史料を整理していた。

それが「古事記」である。安萬侶は、かねて天武天皇の舎人（とねり）側近であった稗田阿禮（ひえだのあれい）が、命じられて古代の出来事を語り部のように暗唱していたのを思い出し、全てを聴き取って記録していた。稗田阿禮が女性（シャーマン）であったとする説もあるようだが、話を覚えるだけなので男女は関係ない。

太安萬侶は、それを元に天智天皇から伝えられてきた大作家の記録―と言っても大化の改新事件の焼け残りに足りない部分を創作し、適当な物語の原稿を個人的に作りあげていたのである。それ

は別に悪いことでは無い。古事記の冒頭で太安萬侶も「臣(やっこ)安萬侶言(も)さく、それ混元既に凝(こ)りしかども、気象いまだ敦(あ)からざりしとき、名も無く為(わざ)も無く、誰かその形をしらむ。」つまり、大昔のことは何も分からないと言っている。分かなければ推測で書くしかない。嘘が重要になってくる。

或る日、裏口から入ってきた太安萬侶からその原稿を受け取った藤原不比等は最初と最後を見てから「良く集めた：御苦勞さん：」と言い、安萬侶が帰ってから原稿用紙の束を机の引き出しに仕舞い込んで誰にも見せなかった。不比等が気に入らなかったのは、先帝に当る文武天皇代のことまで書かれていたからである。

不比等の父親・藤原鎌足が天智天皇に協力して成し遂げた「大化の改新」は、神話時代から続いできた近畿地方小王朝の篡奪(さんだつ)帝位・王位を奪(う)ぐであり、謎と言うよりも秘密が多い。然も、その時代には朝鮮半島の戦争に負けて九州王朝が衰退し、近畿大和王朝は「漁夫の利」で政権を握ったような節があるので正直に書かれては都合が悪い。九州王朝系の太安萬侶が馬鹿正直に書いているかも知れないのである。

藤原不比等は、太安萬侶が収録したり書き足したりした原稿をチェックして年代の近い部分を削り推古天皇で終わらせた。大化の改新やら白村江の敗戦など、都合の悪い部分が除かれ、古事記の最後は推古天皇の名前と住所と享年と墓の場所だけしか書いてない。存在が疑問視される天皇の具体的な女性関係などを綴った物語の結末には簡単過ぎる―これで良いのだ：と不比等は呟き、古事記は日本の正史としての地位を失った。日本書紀

に続く国史の「続日本紀(しょくにほんぎ)」には古事記成立の記事が無く、偽書とさえ言われる。

一方で日本書紀は不比等自らが作るものであるから都合の悪い部分も直せる。自分を引き立ててくれた持統天皇の代まで書いて日本の正史とした。太安萬侶は日本書紀の編纂に携わりながら自分が記録した古事記の方向と違うと感じたが藤原不比等が責任者であるから文句も言えない。「俺には古事記がある：」と我慢をしていた。

これで日本の歴史は大きく歪められたのだが、さらに遡れば、それ以前にもこの国の歴史は改竄(かいざん)される機会が十分にあった。この国が渡来系住民に支配されたことにより、これに抵抗する先住民族は「賊」として滅ぼされ、又は服従させられたであろうから、本来の日本の記録は伝わりようが無い。日本の古代史と言うと聞こえは良いが、実際には「大和朝廷による征服記録」の域を出ないのである。それらのことも初めは語り部が伝えるものから少しずつ文字に変えて全部が漢字になったのは仏教の伝来普及と相俟って西暦六百年代の中頃であろうと推測している。

「語り部」を職業とする人々も、親分から言われたことだけを語り継いでいったのであろうけれども、私の偏見かも知れないが、そういう職に在る人は若者では無いと思う。今ならば「後期高齢者」として何かと差別された人種である。勿論、言い伝える内容は天皇周辺のことだけで、それも一年に一つか二つに限られたから覚えられないことも無い。しかし、やがて語り部も高齢化に伴う思考力・記憶力・判断力の低下のため、覚えておくべき内容が混乱して記憶漏れや思い違いが出てくる。そう言う人々が代々に亘って歴史の申し

送りをしてきたであろうから伝える内容も支離滅裂になるのは当然である。

この様に、日本の歴史は昔からの民族が渡来人に征服されたこと、古来の民族が文字を持っていなかったこと、王朝が次々に変わったこと、権力の争奪が頻繁に行われたことなどで大きく歪められた。都合の悪い史実は削られ、神様の名を借りて手柄は勝者のものとなり、敗者の記録は消されてしまった。庶民のことなどは眼中に無くなる。

庶民は立つ瀬が無いが、地元を例をとれば有名な神田明神の祭礼には何年に一度か「将門神輿」が出されると聞いた。神田明神こと神田神社の祭神は出雲王朝ゆかりの大己貴命(おおなむちのみこと)大國主命と協力者の少名彦命(すくなひこのみこと)であるが、本社には逆賊である筈の平将門の霊が祀られているという。神田神社の創建は日本書紀が編集された頃と伝えられているから古い神社である。初めは海岸に建立された海上安全の神社であったらしいが、天慶三年二月に現在の坂東市(菅井)で平将門が討死にし、京都に送られた首が神田神社の近くに飛んできた。この神社は生前の将門が信仰していたと言われるから将門ゆかりの人物が密かに祀ったのであろう。初めから祭神は平将門であったとする説もある。

日本が帝国主義に汚染されていた時代には「逆賊」とされた平将門や足利尊氏の名前さえ容易には口に出せなかったらしい。将門に攻め込まれ町中を焼かれた石岡の人たちは大丈夫であったと思うが、昭和も二十年までは歴史の一環としてでも平将門研究など始めようものなら、直ぐ憲兵隊か思想警察が飛んで来たと言う。そう言う時代にも神田明神には平将門が祀っており、栃木県には足

利市が存在したのであるから、庶民は権力に抵抗する人物に密かに味方し、そこに敗者の歴史も生き続けているのである。

日本に文字を齎した中国でも「文化大革命」などという思想統制で貴重な文化的遺産の多くが消されたようである。歴史や伝承は、その時代の権力に依って捨てられたり改竄させられたりするから「嘘」を見分けることが難しい。しかし、底辺を生きてきた庶民は、権力に握り潰された真実を何らかの形で伝えている。それを自分の感覚で判断し見極めることが必要なのだと思う。冒頭に述べた大先生のように十年、二十年先を見据えたライフワークを組む。そう言う心構えで既成の伝記や物語を見直し、嘘らしいことを見つけるのも面白いことではあるのだが…歴史の壮大さに気遅れもする。

(第一章 終)

【風の談笑室】

鬼の攪乱という言葉があるが、野口さんと初の「オカリナと朗読のコンサート」を目前にして、突然自宅の庭で意識不明で倒れ、膝、腰を痛打して歩けなくなってしまう。

三年前であった。矢張り同じ時期に、小林さんと一緒に馬滝に脚本のハンティングに出かけている時意識消失を起し、小林さんが居なかったら滝に落ちて命を落とすところであった。気候的にも全く同じような感じで、倒れた日も

生暖かく湿度の高い日であった。どうもこの季節のこの陽気は小生にとつて鬼門らしい。

鬼の攪乱ではあるが、悪運強いらしく庭石に頭を強打して命落とすこともなかった。しかも、脳の検査を始めすべてを視たのであるが異常は発見されなかった。普段から低血圧気味のところへ持つてきて、若干の低血糖が併発したらしい。

自宅庭で倒れ、しばらく意識を失っていたのであるが、トイレをもよおし意識を取り戻し、慌ててトイレに駆け込んだままでは良かったのだが、その後がいけなかった。炬燵に横になって一休みとるうちに、起き上がることもままならないほどの膝、腰の激痛に襲われたのである。慌てて家内にメールをして早めに帰宅してもらった。

大変なのは翌日からであった。何をするにも一人では何もできないのである。

コンサートのリハーサルには小林さんに送り迎えしてもらい、本番では車椅子を押してもらって舞台に上ることになった。

野口さんとは、ギター文化館でのコンサートとしては初めての舞台であったのに、いやはや面目ない限りである。

十分な声量の出せない中、大きな救いであったのは、コンサートに参加してくれたアコースティックギターのオカヤンの朗読伴奏であった。ぶっつけ本番のセッションであったが、朗読を引き立ててもらった。次には、もっと万全な体調の時にやらせてもらいたいと思っている。

コピーブレイク

麻薬探知犬

本田宗一郎氏は、アメリカでオートバイ工場を経営していたら、アメリカ人労働者が日本人並にきめ細やかな神経なら、これは恐怖だと感じたという。終業のベルが鳴ると、たとえネジを締めている途中でも、そのままにして帰宅する始末。翌日次の人は次の工程から作業を始める。こんな国なら、負けはしないと自信を持ったと書いてある。

実は私も同様の経験があった。中米滞在中、その帰路マイアミ空港で乗り継ぎの時、預けた荷物の一つが出てこない。カウンターで拙い英語で詰め寄ったが、午後5時、交代のチャイムと同時に係官は、後任者に何も話さず、サッサと帰宅。また一から交渉出直し。結論は私に麻薬の嫌疑。

係官は別室に私を連れていき、いきなり麻薬探知犬に私の体の匂いを嗅がせた。結果はOK。

次に預けた私のスーツケースを嗅がせたら、シエバードは、ガリガリと爪を立て異常な行動。

係官は『蓋を開ける』と命令。開けたら中から、実は帰り際に現地人から土産に頂いたヘラクレス(オオカブトムシ)の包み。私はホルマリンを注射して殺し、ビニールで七重八重に巻き、孫の土産にと持ち帰ったものである。なんとこれにあの探知犬は反応したのだ。若い係官はいきり立っているの、私は『上官を呼べ』と迫ったら、上官が来て『フープロプレム問題なし』と解放してくれた。

外交官パスポートで、命を的の国際協力の仕事なのに、アメリカ人の、不作法な態度には、ホトホト嫌気がさした。あのポケ犬め!

(菅原茂美)

東北関東大地震災によって会報の発行が一週間遅れることになってしまった。しかし、風の会の皆も、ことば座の皆も棚から荷物が落下する程度で、大した被害を受けなかったのは幸いなことである。

地震発生と同時に停電となり、カセットラジオに電池を入れておかなかった我が家には、携帯電話以外の情報源はなくなってしまった。しかし、その携帯電話も接続が不能となり、役立たずのガラクタになってしまった。

地震とその後の大津波によって東北の海岸に位置する市町村では壊滅的な被害をおおむってしまった。そして、それに鞭打つように福島原発事故が発生し、15日13時現在、予断の許さぬ状態である。

この談笑室の原稿は、後半部の書き直しをしているのであるが、今回の大震災に関して東京都知事石原慎太郎氏の談話が物議を醸していることに談笑室として些かの意見を述べてみたいと思う。

「日本人のアイデンティティーは我欲。この津波をうまく利用して我欲を一回洗い落す必要がある。やっぱり天罰だと思っ」

「フランスのアイデンティティーは自由と博愛と平等。日本はそんなものはない。我欲だよ。物欲、金銭欲」と石原氏らしい指摘をしたという。そしてこの災害を「天罰」と述べたことに非難めいた論説を掲載したものがあつたが、小生は石原氏のいう我欲への天罰、という言葉は支持したいと思う。作家の言いたい放題の文学的表現では全くない。この言葉は日本の、日本人の我欲ボケをズバリ言い当てていると思う。

災い転じて福となす：ではないが、この近々に世界中に起きた大震災に対して、福を手にするためにまだ間に合うのですよ、という天啓と捉えることが出来なかつたら人類は滅びるしかないだろうと思う。

そして、我が国やこのふる里においても「我欲を一度洗い流そう」とこの災害を福に転ずる大きな曲がり角とすることが必要であろう。そうでないと被災者は浮かばれない。

この災害被害の中、花粉症は頂点に達しようとしている。この災害を機に、里山の復活を考え本来の里山の持つ力をつけてやれば、それだけでは駄目であるが原発に依存せざるを得ないエネルギー政策を転換していくことが可能になるのである。

化石燃料が枯渇しているから原子力が代替燃料として登場してきたのである。しかし、石油もウランも有難い廃棄物が大量に出る。見かけの便利は実に不便なものなのである。

石原氏の直接の言葉尻だけに目くらまを立てるのではなく、その言葉を受けて、不便は便利、不便こそが生きる・暮らすことの便利、と発想の転換を図る知恵を持つことが重要であろう。

この大震災を機に、ふる里にもっともって活発な文化芸能活動のおこってくれることを願っている。

災害で物が無くなるとスーパーに買いだめに走り、結局は無駄にになってしまうような所謂「我欲」を戒め、世界に唯一のギターホール、ギター文化館に名器の音に酔い、精神の満腹を楽しむような幸福人を志向してもらいたいものである。

(つづき)

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音(オカリナ)を

自分の手で紡ぎ出してみませんか。
あなたの家の庭の土で…、
また大好きな雑木林に一滴みの土を
分けてもらい、自分の風の声を
「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作
オカリナ演奏に興味をお持ちの方、
連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

《ふるさとの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席
料理のお店です(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃん
皆さんをお迎えいたします。

電話0299-476-60000

編集事務局

〒315-0001
石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-keze.com/>

ギター文化館発

「常世の国の恋物語百」

ふる里とは、物語の降る里です。ふる里に降り落ちた物語は未来への道標。守るべきは里に降り落ちた物語を確りと伝えることです。ことば座は、里に降り落ちた物語を朗読と手話を基軸とした舞(朗読舞)に表現し、明日の夢を伝える劇団です。

2011年ことば座第20回定期公演6月17～19日

第20回公演は、常世の国の恋物語百/第27話として、モダンダンスの**柏木久美子**さんを招き、**小林幸枝**との舞共演で「**流海(うみ)の舞(執筆中)**」をお届けいたします。どうぞご期待ください。

ギター文化館協賛 第2回「**里山と風の声**」 9月11日

《野口喜広のオカリナと白井啓治の詩の朗読コンサート》

ことば座 315-0013茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

- ◎**募集要項**
- 募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
 - 募集人員：6名程度（最大10名まで）※面接及び朗読と簡単な表現試験有り
 - 養成期間：1年間（入塾は随時受付しています）
 - 指導月4～6回
 - 受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）
 - ※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当:白井)までお問い合わせください。